

投稿規定	542
編集後記	544
日本医史学雑誌 第55巻 総目次	545
日本医史学会会報	553

《本号の表紙絵》

江戸医学館課業表『躋寿館百日内講次』（寛政3年1791）

先に本誌52巻4号（2006）表紙絵に、安永3年（1774）の『躋寿館講次』（北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部所蔵）を紹介した。明和2年（1765）に多紀元孝によって開設され、寛政3～4年（1791～92）に官立化され、慶応4年（1868）まで幕府の医学教育研究機関として存続した医学館では、毎年こうした一枚刷りの課業表が作られていたと考えられるが、管見の限り現存するものは安永3年（1774）と寛政3年（1791）の2枚である。

本「講次」は、広島大学附属図書館に所蔵される卷子本『躋寿館規則』に収められ、巻頭に神田佐久間町時代の講堂と見られる建物の絵図「躋寿館略図」、次に「講次」、次に寛政元年2月制定の和文体5条からなる「示入学生徒規約五則」、次に寛政3年春に制定された漢文体16条からなる「学舎規約十六則」、次に甲乙2舎8房に計28人の寄宿生名簿「百日偶宿之者姓名」からなる。

新旧2枚の「講次」は一見すると似通い、また「右講例循旧」とあるとおり毎年ほぼ同様な講義を継続していたかに見えるが、仔細に見れば多くの相違点に気付く。安永3年時が通年開講であったのに対して、今回の寛政3年時は「百日内」の課業表である点が、まず大きく相違する。天明期に入ると主催者多紀氏の財政窮乏によって2月から5月までの100日間に限って開講する「百日教育」に移行したが、寛政3年10月には幕府から百日教育の停止が命じられるので、本「講次」は最後の「百日教育」の様子を伝える資料である。

従来、百日教育のことは多紀元堅『時還読我書』（1839成稿）の記事によって知られるが、同書に「天明4年から7年まで僅か4年だけ開催された」というのは必ずしも正確ではないし、日程も「2月15日から100日間」というのが原則としても、年によって若干の前後があったことがわかる。

課業表の内容について見ると、安永時を年300日開講と仮定して、一書あたり年120時間（『本草綱目』は240時間）の見当。本「講次」の場合、毎日午前8時から午後6時まで開講し、奇偶日と隔2日を組あわせ6日で一周する時間割になっており、『本草綱目』が毎日4時間で400時間、『素・靈』『金匱』『取経揆穴』は隔日2時間で100時間、『神農本経』『難経』『傷寒』が隔2日2時間で66時間となり、百日間に講了すべく時間割に工夫したことが伺える。講師陣は最も注目すべきで、医官としては『素問』の多紀安長（元簡）、『本草綱目』の渋江長伯、『神農本経』の太田澄元（伊澤蘭軒の師）、『金匱』の片倉元周（鶴陵）が注目され、『難経』が一貫して加藤俊丈なのに対して、目黒道琢の『傷寒論』というのは目新しく、「取経揆穴」は多紀元孝が承けた宮本春仙の経穴学統に属する人々である。 （町 泉寿郎）